

# この本を薦めます

学会誌前編集委員長 佐々木 葉

第19回



## 大山 顕

フォトグラファー&ライター  
学会誌月評担当

先月に続き月評をご担当の若手、大山顕さんにお願ひしました。ドボクをはじめ団地や工場の魅力を自由な視点で発信している大山さんに、面白いと感じる対象を深く見つめるための3冊をご紹介いただきました。

自己紹介ではフォトグラファーとラ

だいた。

ライターと言うことにしているが、写真も文章も誰かの元で修行をしたことはない。はつと惹かれた風景や構造物を写真と言葉で直感的に表現し発信する。それを続けているのが大山さん、ということになる。しかし同時に、なぜ惹かれてしまうのかを自分で説明したいと黙考もする。その助けとなった、いずれも友人の手になる本を紹介いた

まずはランドスケープデザイナーである石川初はじまさんの『ランドスケール・ブック』。土木も造園も大地に手を加える仕事であり、スケールという概念は重要だ。この本では、地形、地図、時間、境界、庭という五つのスケールによって大地や風景の見方と扱いのヒントを提示している。大山さんが最初に惹かれた対象である団地も、建築を見



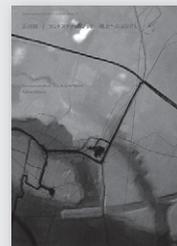
OOYAMA Ken

1972年生まれ。フォトグラファー・ライター。主な著書に『工場萌え』『ジャンクション』。イベント、TV、ラジオ番組などで活動。www.ohyamaken.com

ているつもりであったが実は惹かれていたのはそのレイアウトだったことに気づいた。スケールを変えてみることで評価

も大きく変化する。そういった思考がこの本は厳選された図版を通して教えてくれる。次いで『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』。批評家東浩紀あきらまのり氏の手になるこの本は、福島を対象としたツーリズムを論じるための準備という意味もある。大山さんは東氏とこの話題について対談した際、福島のツーリズムでは土木が鍵になるといふ言葉を聞いたという。悲劇を単にデータの羅列や感情的表現で展示するのではなく、何らかの象徴性によって人びとに伝えること。その先例をチェルノブイリに見ることができると掲載されている写真の力も含め、伝えづらいことを伝えるための示唆となる一冊として紹介いただいた。

最後は『みんなの空想地図』。普通の人の目にとらえる普通のまちのリアルさを、架空のまちの地図をつくることで表現した本である。複雑で理解困難な存在であると思っていた都市や地域が、実はいくつものルールのもとに成り立っていることをこの本から気づいたとおっしゃる。空想地図を使ったワークショップを大山さんも企画しており、普通の人の暮らしの場へのまなざしを刺激する素材として注目できる。私自身も強い興味をもって読んだ3冊であったが、大山さんの着眼点はまたひと味違っていた。しかし共通するのは対象への愛。「今あるものをどう愛でるか」という大山さんの言葉に、未来を切り開くエネルギー源を感じて嬉しかった。



ランドスケール・ブック  
—地上へのまなざし  
石川 初：LIXIL出版



チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド  
東 浩紀：ゲンロン



みんなの空想地図  
今和泉 隆行：白水社